

嬉泉の新聞

嬉泉の新聞／第1号／1985年（昭和60年）5月1日発行／発行所＝社会福祉法人・嬉泉〔東京都世田谷区船橋1-30-9（〒156）TEL 03-426-2323・千葉県君津郡袖ヶ浦町下新田1680（〒299-02）TEL 0438-62-9121〕発行人＝石井哲夫／編集人＝明峯邦夫

発刊によせて

我が社会福祉法人嬉泉は、目下注目されています。それは「自閉症児」という理解や指導の困難な子どもたちにとりくみ続けているからです。御承知のように、昭和40年に発足した「子どもの生活研究所」は、民間の独創的なソーシャル・アクションを展開していき、幼児の創造性の開発や、育児困難な「情緒障害児」や「自閉症児」への治療教育の研究、実践を行って参りました。とくに「情緒障害児」や「自閉症児」が人間関係の学習に不十分な発達を示すことから、この子たちの自発性を回復させるための「交容的交流療法」を提唱して、関係方面から関心をよびました。

子どもの生活研究所のこの仕事から、後続の民間事業が輩出し、「自閉症児」への治療教育実践のブームとも言うべき傾向が見られるようになり、それが今日まで続いてきていることは、まことに嬉しい限りと思っています。そして、この子どもの生活研究所の「自閉症児」への治療教育実践は、現在「めばえ学園」という通所の精神薄弱児認可施設となり、「こぐま学園」と併せて依存として「受容的交流治療」のメッカとしての機能を果たしています。

そして、昭和52年から、新たに制度化された「第二種自閉症児施設」として千葉県の袖ヶ浦町（君津郡）に「袖ヶ浦のびろ学園」という60人収容の施設を開設させたのです。

この施設は、精神薄弱児施設を改善することで「自閉症児」に対応する処置を行うべく発足したもので、北海道の函館市にある「おしまコロニー」の中にあるもう一ヶ所の施設

常務理事 石井哲夫

とともに我国の最初の施設なのです。今や「袖ヶ浦のびろ学園」の評判は、全国各地に広まっています。おそらく精神薄弱児施設や、他の児童福祉関係機関から興味をもたれる理由は「自閉症児」のみ多数（60名）を収容するという現実が想像出来ないほど困難なことだからだと思います。おしまコロニーの場合は精神薄弱児との交流をはかることが出来ますので、我が「袖ヶ浦のびろ学園」のような「純粹さ？」を誇る施設はまさに唯一無二と思うのです。

そのため、この施設の開設以来、発生してきた珍事は数知れずです。これらは、いずれボツボツ紹介していきたいと思っています。

それに昨年開設した年長自閉症のための生涯施設「袖ヶ浦ひかりの学園」は、これ又、40名の収容施設で、よく考えて熟練したセラピストを配し、設備などもくふうしたにも拘らず、何とも理解困難な出来ごともおきてきて、対処に苦心させられた始末でした。しかし、幸い次第に落ちついて来て、目下2施設併せて合計100名の子どもと、70名ほどの大人の生活する大施設となって来たのです。

このような状況のもとで、下手をすると、一般社会から隔離した環境の中で、孤立した生活が営まれていきますので、この際何とかして施設の内容や、その他仕事の内容を皆様方にお伝えしたいと思い、この新聞を発刊することにいたしました。どうか、より多くの人たちに私どもの「社会福祉法人嬉泉」の仕事を御紹介下さり御声援を賜わりたくお願い申し上げます。

「社会福祉法人 嬉泉」の歴史は20年前にさかのぼります。世田谷区船橋一丁目に理事長 須藤晃弘が四百坪の土地を購入し、それをもとに私たちの社会福祉の仕事が始められたのです。まず、「嬉泉子どもの生活研究所」が設立され、相談事業が開始され、相談の延長となる幼児保育の場「すこやか幼稚園」が併設されました。やがて、この中から、小人数保育の「すこやかグループ」や自閉症児を保育する「めばえグループ」が生まれました。その後、自発性を育てることで才能をひき出す「才能保育グループ」や自閉症児学童のための「木曜グループ」、知恵おくれの子どものための「子ぐまグループ」などの保育や治療教育の活動が実践されてきたのです。この実践の推進力となって法人の仕事を次々に開拓し、適切な経営状態にむかってたくみに舵をとりつづけ、子どもたちと職員の幸せのために「人間関係の根源」に対して、ひたすら洞察と直観の眼を向けつづけてきたのが、法人の常務理事 石

井哲夫でした。こうして私たちの仕事は、資産家であり篤志家である須藤理事長と、福祉に情熱を燃やす心理学者 石井常務理事の力に支えられて今日の姿にいたったのです。20年の間にはいろいろな事がありました。荒波もあつたけれど楽しいことも多くありました。

多くの子どもたちが私たちの手元からはなれ、すこやかに成長していきました。昔、保育をしていた子どもが成長して法人の職員となつたりもしています。そして今、これが私たちの仕事となつていっています。

自閉症児・者の療育システムの完成へ

私たちのしごと

○第二種社会福祉事業

家庭相談事業

・子どもの生活研究所

○第一種社会福祉事業

精神薄弱児通園施設

・子どもの生活研究所

めばえ学園

第二種自閉症児施設

・袖ヶ浦のびろ学園

精神薄弱者更生施設

・袖ヶ浦ひかりの学園

○附帯的公益事業

福祉処遇育成事業

・ほほえみ基金

○法人本部

社会福祉法人 嬉泉の法人本部は東京都世田谷区船橋1の30の9にある子どもの生活研究所内にあります。法人の定款をかえたり各事業所の諸規定を定めたり予算や決算の業務、補助金や助成金の申請、寄付金の受入

○子どもの生活研究所

子どもの育て方についての相

談を行なう「相談部」が中心となり、相談指導の延長として子どもにあつたいくつの指導の場が用意されています。

・「すこやか学園」は健常児の保育グループですが、教育訓練的なやり方はせず、子どもの自発性を伸ばすことで能力を育てていこうとする方法をとっています。この子どもたちにとっては、障害児とふれあいその存在を自然に理解し、差別することなく対等につきあうていくことを学ぶ最初の機会となります。

・「子ぐま学園」は、自閉症児の中でも幼稚園や学校などに所属していて指導されている子どもたちのための通所治療を行なうグループです。週一回から三回まで各一時間三〇分の個人セラピーがおこなわれます。遊戯療法と課題指導の方法がとられますが人間的交流を根本原理としています。

・「子どもの部屋」は乳幼児の保育について種々の悩みをもつ親ごさんと協力して保育を行なう新しいタイプの託児室です。安全、衛生面でも十分に配慮され、子どもと保育者の心のつながりを重視した生活グループです。

・「母子入園部」は自閉症児、者や情緒障害児、者の生活指導に困難を感じる親御さんのための短期宿泊をとまう相談研修と子どもの集中療育をかねたシステムです。このための専門施設が千葉県袖ヶ浦町にあります。

○子どもの生活研究所

めばえ学園

30名定員の精神薄弱児通園施設

ども達は登園してきます。指導は集団指導の形をとりませんが、できるだけ個人的に対応できるように指導場面を工夫しています。登園から帰園までの限られた時間での指導ですので内容を密にする努力をしています。

○袖ヶ浦のひろ学園

千葉県袖ヶ浦町に昭和52年に



本年1月の治療教育セミナー
袖ヶ浦のひろ学園にて

設で、国と都の措置委託費によって運営されています。子どもは自閉症児が主体で傾向別に三つのグループに分かれています。毎朝、学園のバスが巡回して子

精神薄弱児収容施設として設立され、昭和56年に第二種自閉症児施設として再認可を受けました。定員60名、職員40名の自閉症児専門施設です。

○袖ヶ浦ひかりの学園

昭和59年に袖ヶ浦のひろ学園の隣りに設置された40名定員の精神薄弱者更生施設です。職員は30名で、居住者は自閉症者を中心としています。25才が最高年齢です。生活は趣味や興味をいかした作業を覚えてもらえるように配慮されており、社会に一步ふみ出そうという準備をしている人もいます。まだその準備のできていない人にも音楽指導、買物指導、運動、散歩などを通じて興味をひろげ適応力をつけていく処遇がなされています。ここでも処遇の基本はやはり人間関係です。

○ほほえみ基金

この活動は重度精神薄弱の長男をかかえ自らもスモン病にお

かされながらもほほえみをわすれず明るく生きた、故武藤生子氏の遺志により法人に寄贈された基金をもとになされています。毎年全国から施設処遇の実践的報告論文を募集し、その中で、すぐれたものに、「ほほえみ賞」「ほほえみ奨励賞」を贈呈し、報告内容を全国に広く伝えるものです。本年は第9回目の受賞式がおこなわれます。

この他にも法人の活動は幅広くおこなわれており、自閉症児の治療教育セミナーを、箱根、東京、千葉で開催したり、研究発表の年報を発行したり、世田谷区内の保育園に療育指導に出張したりという活動をしています。又、石井常務理事は北海道から九州まで出張講演したり、学会に療育成果を発表したり、雑誌に論文を載せたりして、自閉症児の療育方法を広く伝える努力に明けくれています。職員の勉強も重要視されており、年三回の合宿研修の他に毎週一回定期的にケース検討会を開き、療育方法の研鑽につとめています。昭和41年に認可された法人ですが、20年間の自閉症児療育の経験を大きく育てていきたいと願っています。

地域との交流を

深める場として

——のびろ祭りバザー報告

のびろ祭りバザーは去る二月十七日(日)に行なわれました。当日は早朝からお客様がたくさん来て下さり、大盛況でした。

のびろ祭りバザーは七年前、袖ヶ浦の地にのびろ学園が出来、その年の終りに地域の方々と交流の場として計画されました。第一回のバザーにおいて下さった地元のお客様は少なく、地元の職員の近隣、知り合いのかた数名と、福祉センター養育園のお子さんだけで、多くは東京の子どもの生活研究所在園のかたでした。のびろ祭りバザーを行なうたびに感じて来た事は、この袖ヶ浦ののびろ学園の存在が徐々に地元根をおろしてきている事でした。七回目をむかえて、袖ヶ浦ひかりの学園が新たに開設されて一段と規模が大きくなった袖ヶ浦の学園を皆さんに知っていただきたいという思いが私達にはありました。

広報部門で子どもたちの作品を展示し、その生活ぶりを紹介した、子どもの生活研究所の紹介を

したのは、建物だけではなく内容を知っていただきたいという願いが含まれています。

バザー準備の方ですが、例年私達職員が計画をたてて、子ども達の日常の指導と並行してバザー準備をやってきました。バザーが近くなると、事務室の電話が献品依

バザー収入総計表

総務	477,169円
献品	609,813円
手芸	205,060円
子どもコーナー	93,640円
食堂	351,579円
委託	107,741円
合計	1,845,005円

頼や業者連絡でふさがってしまふほど大変な状態でした。今年は、お母様方が、長浦駅や袖ヶ浦駅付近のお店を一軒一軒訪ねて、献品依頼をして下さったり、知り合いの方に声をかけて品物を集めて下さったり、値段つけをして下さった方々がいます。

又、前日学園に泊った、子ども達

の御父兄が職員にまじって泊まりがけで準備をして下さり、当日も多くの方々が売場に立って下さいました。

私達はこのように、学園の考えを理解して下さった上で御父兄が積極的に先生達を助けて、学園の行事を盛り上げていこうとする気持ちをしるしく感じとっています。

学園のお祭りとバザーをかねている行事は、子どもたちと職員と御父兄で盛り上げ、その中で地元の方々と交流を深められたらよいのではないかと、思っています。その点、今年は御父兄と子ども達の参加度が、一歩前進したように感

じています。総務としては、もっと御父兄や子ども達が活躍する場をつくらなければいけないことを感じています。来年にひきつぎたいと思っています。

皆さんのいろいろな方面での御協力によって、第七回ののびろ祭りバザーは大盛況のうちに終りました。収益も一八万五千五百円という今までにない成績です。この収益は、以前から職員が望んでいたふとん乾燥機購入の一部にあてることができました。

御協力ありがとうございました。
(山根美江子)

嬉泉日録

袖ヶ浦のびろ・ひかりの学園

- 1月25～27日 自閉症児・情緒障害児の治療教育セミナー
- 2月17日 第七回のびろ祭りバザー
- 2月26日 国立特殊教育研究所43名の見学
- 2月28日 国立秩父学園職員、父兄20名の見学
- 3月5日 千葉県愛護協会、給食研究会
- 3月12～13日 あさけ学園との交流会
- 3月21日 君津地区同盟の方々によるもちつき大会

東京・子どもの生活研究所

- 3月14日 地域活動育成事業としての無料相談会
- 3月19日 すこやか学園卒園式
- 3月22日 めばえ学園卒園式

(一九八五年1月1日～3月31日)

嬉泉の新聞第二部

ひかりのタイムス

昭和55年の創刊以来、御愛読いただいた「のびろタイムス」がひかりの学園の開設に伴ない「ひかりのタイムス」と改題、法人機関紙「嬉泉の新聞」第二部として新発足することとなりました。これまでと変らぬ御支援のほどを心よりお願いいたします。

【特集】「ひかりの」での一年

ひかりのの一年

村岡 敦

ぼくは、一九八四年四月、のびろ学園をそつ業して、ひかりの学園に入園した。始めに、四月一日(月)、子供の生活研きゅう所前から、都営バスに、のってひかりの学園まで来ました。始めて見た時は、のびろみたいに、広くなかった。始めて見る先生もいた。たとえば、浜中先生とか、浜田先生とかである。

ドライブでは、小松君とドライブする事が多くなった。それからコースター通園から、都バス、そしてかん光バス通園になった。六月に石井先生と、話しをした。

あと七月には館山の古伊万里に行った。ぼくが思っていたより、古い店で、和風の店だった。

それから合宿に行った。行先は道志村、行った人は、田中君、吉原さん。飯田真奈子さんなどです。あとは子供の国まで行った。場所は、市原市である。そこで、プールに入った。八月の中じゅん、下じゅんに行った。

あと、すいか売りを、夏にした。これは面白かった。あと女の子で吉原夏子、秋山良江がぼくをからかうようになった。あと運動会があった。ぼくはアナウンスをした。それから、部屋がえがあった。田中君はルンルンにひっこして、かわりに小松君と一しよの部屋に

なった。小松君は電車の話が好きだ。ぼくも電車にのるのが好きだ。あと、この間、ミニバザーがあった。ぼくは田川先生とやきいもを売りました。いろいろな人が買った。あと田川先生がこの三月で退しよくするのでさびしい。

ひかりの学園の一年をふりかえって

伊藤 訓育

- ① あゆみのおあつまりが始まった。
- ② 山岸、田中、工藤、飯田がルンルンアパートにうつる。
- ③ のびろ・ひかりの合同運動会。
- ④ 伊藤くんのめがねが黒色と茶色に交互した。
- ⑤ 小松・良江・谷らが部屋にはいらなくなった。
- ⑥ テレビ十時以降に禁止となった。
- ⑦ 内田君と同室となった。
- ⑧ 田川先生が退職をした。
- ⑨ せびろをしんちようした。
- ⑩ 加藤先生がはいった。

ひかりの学園に

入ってからの事

市川 浩志

四月から寒川へよく行きました。一回たてしなから飯山線経由で行

った事がありました。九月に旅行中おまわりさんにはなしかけられた事がありました。旅行はやめたいと思っています。

十一月からは鶴岡へ三回ぐらいはいきました。あと先生の金をとってどっか行っちゃってもうお金をとるのはこりました。一月からもう今まで三月終りまではたらきばなしです。さいごに駒田さんに会えてうれしかった。

あとはとうげいをやって石井先生からちゅうもんをうけて作って金をもらえるようになりました。それで馬の首つきはいざら馬のフタつきおきものなどを作っています。とうげいで馬つきはいざらをつくってやきいものときにうって来たいです。

ひかりの学園に

はいつて

よかったこと

伊藤 訓育

- ① あゆみにはいったこと。
- ② 谷くんとけんかしなくなった。
- ③ 秩父鉄道の観光バスにのってよかった。
- ④ 静かになった。
- ⑤ 市川くんがとつかんはげといわなくなった。

ひかりの一年を

ふりかえる

山岸由田加

一九八四年は、一つの節目だった。私が成人施設に移り、環境の変化がおきた。

前から予想された事とはいえ、いざ体験してみると、やはり環境の変化の対応にとまどった。

それもある程度慣れて、成人施設の生活を過ごすようになった。

84年秋のこと、先生から職員寮に移るように言われた。理由はフツターの学生が大学に入って下宿するように、あなた達も人なみに下宿生活をおくろう。(衣食は従来通り、食事、洗濯も人まかせ)

ただしいきなりはムリだから、あなたの友人し君と、職員寮で共同生活をする——と先生は、私と同室者のし君に、語った。

又、環境が変わった。今度は自由に施設や寮をいったりきたり出来る。そのかわり、ズシリと重い責任が、私の肩にのしかかった。そう感じた。

そこから、白い何もないところから出発していった。それがどう私にプラスになるのかは、神様のみが知っていらっしやる。

しかし理由はどうあれ、私の人

生史上初のアパート生活・共同生活は始まった。

失恋悲劇

それと並行して、恋物語が同時進行していた。

この時、自分の体の中のエネルギーは、燃えていた。

生れて始めて「青春」というのを肌で実感した。

自分は今青春というのを、この瞬間味わった。

その青春の日々はある意味で、私にとって充実した日々だった。

相手の心をつかむため、ラブレターを送ったり、あいさつしたりいろいろ努力した。

しかしむなしい努力であった。相手が自分に対して関心を持たなかったから……。

でも、それは、自分の力が足りなかったからだ……。失恋喜劇を演じた主役は一人反省をした。

心の準備もしないまま、相手に話しかけた。

かえって逆に意欲が空回りして行動がちぐはぐだった。

・相手に衝動的に近づき、この状況で何をすべきかを考えずにやっ

た。

・トラブルをおこさないように、事なかれ主義をとった。

——等いろいろな失敗という名の

「教訓」を残した。

しかし私にとってこの失恋は長い目で見れば、自分にとってプラスになると信じている。

次は良い人が自分を愛してくれる事を自分は、望んでいる。

自分もふさわしいように、人格を磨き努力する。その日が、その瞬間が来るのを私は今望んでいる。

今年(昭和60年、一九八五年)は充電の年である。

コマージュと

お知らせ

「のびろタイムズ」をお読みになった読者はひらがなで書いた、私の文章を見て、おやつと思っ

びっくりするでしょう。

私は今回から、読者の皆様にわかりやすいひらがなで字を書く事にしました。

もうカタカナで文章は、書きません。理由は、私はこれまでカタカナを書いてまいりましたが、読者にはわかりにくく、読みづらいという御意見がありましたのでひらがなの文章にする事にしました。

それから私個人の半生を書いた本を処女出版する事になりました。

(石井所長と共著です。——出版予定日、出版社は未定)

作者の手前味噌のコマージュですが、この処女作が上梓したあ

かつきにはお買い求め下さい。

内容は、私の考えている事を書いて本にまとめた形になっています。予定としては、今年中に出版したいと、私は思っています。

充電の年

一九八五年、昭和60年で私は25歳、早いもので、20代中ばになりました。

この本を書く事を山登りにたとえますと、山を登るのは、苦しい。

この山を登れば、自分の人生に一つの記念碑を打ち立てる。

そういう苦しみとプレッシャーとの闘いが本を出すまで続く。

長いコメントになりましたが、私がいいたいのは、一九八五年、昭和60年は本を書いて創る事が中心になります。

しかし、充電していろいろなものを吸収してく年でもある。

そう私は考えている。

これからは、20代後半、30代へと向って行く。

私の人生はどうなるのか、それは、神のみぞが知ってる。

先はまだ五里霧中也。

俳句

菜種梅雨 心の悲しみ

洗い流す

流水子